

北見工業大学 国際交流センター 〒090-8507 北見市 公園町 165

中国語研修を終えて

去る3月、11名の学生が中国の交流協定校のひとつであるハルビン工程大学での3週間の中国語研修に参加しました。11名のうち、2名は昨年度の同研修のリピーター、2名は中国語履修者、残りの7名は全くの初心者でした。それぞれの感想を、ひとことずつお読みください。

▼ 第一印象について

私の中では、餃子事件、歴史問題などといった複雑な問題がたくさんあり、中国という国に対してあまり良い印象を持っていませんでした。歴史問題などを考えると日本人だというと石などを投げ付けられても仕様がなかなと思っていました。でも実際ハルビンに行ってみると、何人かと聞かれて日本人と答えたら、石を投げつけられるどころか、遠いところからよく来てくれたねとよくしてくれました。(機械システム工学2年 太田真人)



ハルビン工程大学 正門にて

▼ 授業について

私は中国語を履修しておらず、完全にゼロからのスタートでした。授業は総合と口語の2種類があり、両方の授業に共通する特徴は、とにかく声に出して発音し、そして紙に書く事でした。このような作業を毎日繰り返し行っていたので、小学校に戻ったような感覚がしましたが、おかげでスポンジが水を吸うように、いろいろな知識を短時間でたくさん吸収していきました。このときの私は、毎日がとても楽しく、そして充実した生活を送っていました。(機械システム工学科3年 斉藤圭輔)



修了証書を手に、先生方と

中国語の授業は毎回とても楽しかったです。予習と復習を毎日きちんとし、プラス荻原君と日常会話を勉強し、中国人はどんな人なのかを考察し、どうやったらもっと打ち解けられるのかを試行錯誤し、紙に記し、発音練習もして、非常に有意義な時間を過ごせたと思います。おかげで授業で習っていないことも少なからず身に着的かと思えます。「本当の勉強ってこういうことなんだ! 学習することってこういうことなんだ!」と改めて自ら取り組む姿勢の大切さを痛感しました。(マテリアル工学科2年 宮原正樹)

中国語がとことん面白いと思った。小、中、高で親しみのない言語をいきなり現地で学ぶことの楽しさといったらないです。(マテリアル工学科2年 佐藤こずえ)

▼ 課外活動について

研修では、琴、習字、太極拳の授業も受けた。中で特に感動したのが習字。先生は最後の授業で学生一人ずつ好きな一文字を書いて下さり、私は音楽が好きなので「音」と書いてもらった。半紙を手に取り字を見て間もなく自然に涙が溢れてきた。しばらくその「音」をじっと見つめた。日頃趣味として作曲に力を入れている私は、自分なりに「音」という字の持つ世界を解釈できた。いつもなら音を聴いて感じるどころを、見て感じられたのは新鮮だった。音のない音、これに気付くことができた。(電気電子工学科4年 沖松一弥)

▼ 見学について

観光でも新しい刺激を得ることができました。特に731部隊の資料館が印象的でした。今まで戦争の被害者としての日本については話を聞いたり、資料を見たりしてきました。しかし、加害者としての日本について、詳しく考えたことがあまりなかったことに気がつきました。(土木開発工学科3年 塩田裕紀)

▼ 文化の違い

中国では、日本との相違点に触れることができ、とても良い刺激を受けました。例えば、中国では水道水が硬水のため日本人の体に合わなかったり、トイレ・シャワー・洗濯機が一か所にまとめられていたり、学内の売店でレジ袋の有料化が行われているにも関わらず、ゴミの分別は全く行われていなかったり等々、日本との違いを体験することができました。(化学システム工学科3年 高村裕哉)



書法の先生に書いて頂いた字



太極拳の授業



古箏の授業



交流会でオリジナル曲を披露



東北虎林園にて

▼ 交流について

現地の学生とサッカーをする機会があつて、英語で話しかけると向こうもいろいろ話してくれて嬉しかったです。中国の学生は英語を話すスピードが速くてすごいと思いました。サッカーの後、寮に連れて行ってくれました。日本の漫画やアニメにも詳しいのに驚きました。中国の学生も漫画を読んだり映画を見たりと日本の学生とそれほど変わらない生活をしているということもわかりました。全部英語での会話でした。帰るときの再見！くらいしかまだ中国語を話せませんでした。もっと英語と中国語を勉強しておくべきだったとその時に初めて気がつきました。(マテリアル工学科2年 荻原拓也)

今回で2回目となる研修では、クラスメートとの会話はほとんど中国語で、世界の共通語が英語という世の中で共通語を中国語として話すことはすごく面白いことでした。特に韓国人の人とは芸能界の話やちょうど行われていたWBCについての話が出来、ニュースでしか聞けなかった韓国での野球の人気や盛り上がりを感じることができ、直接韓国の人と話すことにより実感できたことは嬉しかったです。↗

また、留学生同士が集まった時には日本人・韓国人・在日朝鮮人・ロシア人・モンゴル人という北東アジア5カ国の人が集まり中国人が1人もいない中、中国語で会話しながら酒を飲むという、なかなか国際的で珍しい、とても貴重な体験ができました。(機械システム工学科3年 藤井勇貴)

全体を通して今回の研修で感じたことは、“やっぱり人と出会うってのはいいなあ”ということです。僕はこの研修のおかげで中国にはもちろん、クラスメイトなど、出会って仲良くなった人の出身国に親しみや興味を持つようになりました。例えば、クラスメイトの出身国であるロシアの少数民族であったり、韓国の野球選手だったり、その人に出会わなければ知らなかったことを今回知ることが出来たのは本当に良かったです。また、他の国の人には日本に対して積極的に質問をしてきて自分達の国のことも好きだ!という雰囲気が伝わってきたのに比べ、自分は他の国のことも日本のことも良く知らないことを痛感させられ、恥ずかしくも悔しくも思いました。これを機に、もっと深く、自分の国も外国も知ろうと思いました。(機能材料工学科 博士前期課程1年 結城雄大)



ソフィア大聖堂

▼ 仲間とのふれあい

今回一番学べたことは、人と関わることの重要性だと思う。中国に行く前は、もう大学生だし、勉強も基本的には一人でするものだと思っていたから、人との付き合いに消極的だった。今回の初心者クラスは、北見から行った学生だけで構成されていたため、クラス内での交流はとても多かった。一緒に勉強をして、観光に行って、ご飯を食べて、飲んで、話して、歌って、はしゃいで、笑って。そうやって3週間はあっという間に過ぎていった。色々な話を聞く機会に恵まれたから、今の自分では駄目だと思えたし、もっと色々なことがしたいという欲求が芽生えてきた。そうやって人と関わったことによる、自分の変化がすごく大きなものであったことに驚いた。(マテリアル工学科2年 梶原奈々)



現地の学生との交流

▼ 最後に

日本に帰った。

今日も明日も明後日もやりたいことをがむしゃらに頑張っている自分がいる。(化学システム工学科2年 佐藤こずえ)



円卓を囲んで



今年の語学／交流研修について

今年の夏に例年通り予定されていたカナダでの英語研修は、豚インフルエンザの関係で残念ながら見送ることになりました。今回参加を考えていた皆さんは、是非今から英語の基礎固めをして来年度に備えてください。また、今年の夏は韓国の交流協定締結校である慶尚大学校工科大学から、交流研修のために訪問団が来る予定もありましたが、こちらはとりあえず、来年1月に延期することになっています。

今年度の語学研修は他に、韓国語と中国語を予定しています。韓国語研修は、夏休み中の実施の可能性を検討中、中国語は昨年どおり3月の予定です。

ビンゴゲームで「どうぞよろしく」

@ International "C" Hour



4月のインターナショナルCアワーは、新しい留学生を多数迎えてにぎやかに行われました。この日の企画・進行を担当してくれたのは、国際交流サークルOFICのメンバー。化学システム3年の高村裕哉さんと機能材料工学科博士前期課程1年の長澤則英さんの司会のもとで、参加者は自己紹介をしあった相手のナンバーを埋めるという形でビンゴゲームを楽しみながら、交流のひと時を持ちました。

ハルビン工程大学の李 茂瑛さんと栞奕さんは、新しく来た10名の交換留学生の中の一人。「中国ではビンゴゲームはあまりしないので、今回が初めてでした。いろいろな人と話せて、楽しかったです」と話していました。



お知らせ

* 次回のインターナショナルCアワーは、7月6日（月）に予定しています。今回は、北見出身の歌手、おがわちからさんをお招きしてのミニコンサートです。男性でありながら、ファルセット（裏声）で名だたる女性ボーカリストの曲をカバーし、衣装やメイクでも観客を魅了しているおがわさんのステージを、この機会に是非お楽しみ下さい。コンサートのあとは、いつものようにお茶とお菓子を用意しております。4時半から、場所は講堂です。

* 6月20・21日の大学祭で、留学生を対象にいけばな講習会と着物の着付けを企画しています。また、北見藤女子高等学校 茶道部の皆様のご協力で、国際交流お茶会も催されます。こちらは一般に公開されますので、どなたもお気軽にお立ち寄り下さい。外のお祭り広場では、中国、韓国、台湾、そしてウイグル出身の留学生が、それぞれのふるさと料理の店を出す予定です。こちらも乞うご期待！

* これまで国際交流担当であった本庄係長は、6月1日をもって総務課に異動になりました。

World Wisdom

友を見つけた、と悟る瞬間の、
なんと稀でなんと素晴らしいことか。
—ヨハン・ヴォルフガング・
フォン・ゲーテ
(ドイツの文豪)